いろは文字鏈（その十九―人麻呂に触れる）

江尻成泰

いろはにほへと　ちりぬるを　色は匂へど　散りぬるを
わかよたれそ　つねならむ　我が世誰ぞ　常ならむ
うゐのおくやま　けふこえて　有為の奥山　今日越えて
あさきゆめみし　ゑひもせす　浅き夢見じ　酔ひもせず
（ん）

一　潮騒に　伊良虞の島辺　漕ぐ船に　妹乗るらむか　荒き島廻を（巻一―四二）

伊良虞をそぞろ　櫓を漕ぐ船は
春の潮路に　和風呼ぶ帆
帆に風捕へ
紅の裳裾と　豊の袖縁
千重波に乗り　柳眉は笑みぬ

二　東の　野に炎の　立つ見えて　かへり見すれば　月傾きぬ（巻一―四八）

野は秋野なる　彼方眺むるわ
瑠璃炎を　彼の皇子の日よ
忘れじの岡　逞しくあれ
よき若子また
麗日なるぞ
空は明けつつ　月沈みかね

三　大君は　神にし座せば　天雲の　雷の上に廬らせるかも（巻三―二三五）

念ず貴き名　名に負ふ力
磊磊治む　無窮の殿宇
雲上住まゐ　居座す帝の
告言よおお
畏れは深く　奇しき岳や
弥雷山　万葉続け

四（イ）　鴨山の　岩根し枕ける　われをかも　知らにと妹が　待ちつつあらむ（巻二―二二三）

今日のみ思ふ　臥すや岩床
ここに声絶え　縁鴨山で
天暗くああ　敢へなき脆さ
さや吾妹無き　昨夜の汝思はゆ
夢に妹求め　瞑目する身

四（ロ）　直の逢ひは　逢ひかつましじ　石川に　雲立ち渡れ　見つつ偲はむ（巻二―二二五）

依羅娘子

身を横たへし　白き岩故
怨悩噎び　火の石川も
百雲立たせ　背をば偲はす
姿は　これ　无……

（平成二十九年十一月二十五日）

註

柿本人麻呂＝生没年未詳。持統・文武朝の宮廷歌人。歴史書に記述はなく下級官吏だったと思われ、万葉集から窺われるだけで閲歴はほとんど不明。歌品、技巧共に一級の万葉歌人。枕詞、序詞などを効果的に使い、雄渾、荘重な作風の長歌も多い。古来、歌聖の誉れ高し。

本歌一＝持統六年（六九二年）三月、伊勢行幸。都に留まっていた人麻呂の歌。行幸に供奉する女官を想像した。それは人麻呂がよろしく思う相手で「妹」（広くは妻、恋人、姉妹）と言っている。伊良虞は愛知県渥美半島の伊良湖岬。島廻は島の辺り、周辺。

和風＝やわらかい、穏やかな風。和はやわらかいの意味を表すので和草、和毛に倣った。

豊の袖縁＝ゆったりした袖。縁には特に意味はない。

柳眉＝柳の葉のように細く美しい眉。柳眉柳髪は美人の形容。人麻呂の恋人を美人に描いた。

本歌二＝軽皇子が安騎野に出かけた時の歌。軽皇子は天武天皇の皇子草壁皇子の子。草壁は母持統の期待大きく天武の皇位継承者であったが、即位せぬまま早世。持統の後に軽皇子が文武天皇となった。まだ幼かった皇子が、曾て狩猟をした父君を思って安騎の野を訪ねた時に人麻呂が歌った長歌の反歌四首の中の一首。日（天皇）と並ぶ、というので日並皇子と呼ばれた草壁皇子を偲んでまんじりともせず夜を明かした朝の情景。

炎＝日の出前に地平線上に見える赤みを帯びた光。いわゆる陽炎ではない。

秋野＝原文題詞にある安騎野。奈良県宇陀市大宇陀一帯の山野。今、人麻呂公園やかぎろひの丘がある。

彼の皇子、よき若子＝草壁皇子とその子軽皇子。

本歌三＝「天皇、雷岳に御遊しし時」人麻呂が作った。天皇は誰か不明だが、持統ではないかと言われている。「天雲の雷の上」とはどんなに高い峨々たる山かと思わせるが、明日香にそんな高い険しい山はない。明日香村雷にあるほんの小高い樹木の茂った小丘である。天に轟く雷鳴に天皇の威光をかけた。（雄略天皇の近侍栖軽が天皇の命で雷を

探し見つけた場所を雷丘という――『日本霊異記』の説話）

大君は　神にし座せば＝大君は神でいらっしゃるので。

磊磊治む＝磊磊は心が広く小事にこだわらないこと、鷹揚。

無窮の殿宇、雲上住まゐ＝本歌では仮小屋、仮宮を造っておられる、であるが、人麻呂の「天雲の雷の上」という誇張に倣って仰々しく言ってみた。殿宇は殿堂、御殿だ。

告言＝御命令、詔。

奇し＝人知を超えて霊妙、神秘的。

弥雷山＝弥は数や（特に良い事、めでたい事の）程度が多い、重なっているの意味。ここでは立派な形の重畳たる山と描いたが、ここまで言うと誇張も度が過ぎるか。

万葉続け＝万葉はよろずよ、万代、永遠。

本歌四（イ）＝人麻呂が石見国（島根県の西部）で死に臨んだ時悲しんで作った歌、と題詞にある。鴨山の岩を枕に死に瀕している私を、そうとは知らずに妻が待ち続けているのであろうか。

鴨山がどの山か、また次の（ロ）の歌の石川がどの川か、よくわかってないそうで、そもそも彼の臨終の地が石見ではなくて、大和葛城地方だとか河内国だとか研究者の説があるらしい。いずれにしても、宮廷歌人として幾多の讃歌を捧げ、数多の名歌を残しながら、日本書紀、続日本紀に一度も名前が出ず、人知れず山里で一生を終えたということだろうか。

今日のみ思ふ＝あれこれ頭の中を思いが巡るのも今日限り。

さや吾妹無き＝「さや」は清か、清けしのサヤで、澄んだ、さっぱりしたの意味。愛しい妹の形容とした。

本歌四（ロ）＝直接に逢うということはかなわぬことでしょう。石川に雲よ立ち渡れ。その雲を見てあの人を偲びます。

人麻呂が死んだとき、知らせを受けた妻の依羅娘子が二首作った中の一つ。依羅娘子は巻二―一三一に人麻呂が石見国から妻に別れて上京した時の歌に「寄り寝し妹」と詠まれている、石見で娶った女性だと思われるが、いや河内国の依羅の地の人であるとか、

石川も河内国の大和川に注ぐ石川であるとか、学者の説はいろいろあるらしい。

なお、雲や霧を見て故人を偲ぶ歌は多い。（火葬の煙のつながり？　続紀によれば火葬の始まりは文武四年）。霧や雲と死者への思いの例を二首。

山の際ゆ　出雲の児らは　霧なれや　吉野の山の　嶺にたなびく（巻三―四二九）

昨日こそ　君は在りしか　思はぬに　浜松が上に　雲とたなびく（巻三―四四四）

百雲立たせ　背をば偲はす＝本歌では、雲よ立て、それを見てわが君を偲びます、であるが、少し変えて、（石川が）たくさんの雲を立ち渡らせて私に夫を偲ばせる、とした。背は妹の対で女性から見て兄弟とか、恋人や夫。

（平成二十九年十一月二十九日）

後記

今回は柿本人麻呂を取り上げた。

万葉集を何度かやり、その中では家持の出番が多かったが、人麻呂はその昔「その四」で羅馬に遊ばせただけだった。あの大詩人もお呼びしなければ、と少し欲を出した。

（平成二十九年十一月二十九日）